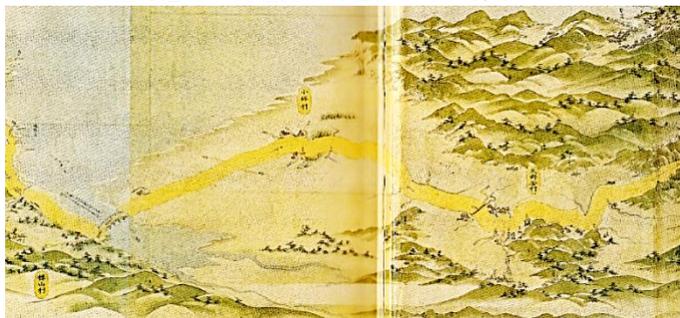


季刊マーメイド

逗子市立図書館報
第15号
2017年2月1日発行
逗子市立図書館
逗子市逗子4-2-10
046(871)5998
<https://www.library.city.zushi.lg.jp>

逗子の浦賀道(うらがどう) ～江戸期 三浦半島の交通と人々の生活～

江戸時代の測量絵巻『浦賀道見取絵図』より久野谷村・小坪村・桜山村部分



『五街道分間延絵図』

これは、江戸時代後期、一八〇〇年頃に測量されて描かれた逗子で

す。江戸時

代は、五街

道(東海道・

中山道・日

光道中・奥

州道中・甲

州道中)を

中心として

道が整備さ

れていまし

た。五街道

から分かれ

て各地に行

く道を脇街

道といいま

した。東海

道の脇街道の一つに、逗子を通り

抜ける**浦賀道(うらがどう)**があり

ました。幕府は、脇街道も含めた五

街道の測量図の作成を命じ、文化

3年(一八〇六)に測量絵巻『五海

道其外分間延絵図並見取絵図』(国

指定重要文化財・通称『五街道分間

延絵図(ごかいどうぶんけんのべ

えず)』が完成しました。この測量

絵図は全九十一巻、縦幅は約60センチ、

長さは15センチのものから30センチのも

のまであります。その中の一巻に

浦賀道を描いた『浦賀道見取絵図』

があります。この絵図には逗子の

小坪村、久野谷村、桜山村が含まれ

ています。江戸時代の浦賀道をた

どりながら、当時の三浦半島の交

通と、人々の生活に思いを馳せて

みたいと思います。

三浦半島の主な道

三浦半島の道は、かつて幕府のあつた鎌倉を中心として整備されていきました。江戸時代に入り、半島の先端にある浦賀や三崎を終点とする浦賀道や三崎道が整えられました。浦賀と三崎が流通や海防において重要拠点になったことに加え、享保5年（一七二〇）には奉行所が下田から浦賀に移り、江戸との往来が増えたためです。19世紀になって異国船への警戒が強化されると、ますます浦賀が重要な場所になってきました。

江戸から陸路で三浦半島に入り、浦賀までの道をたどってみましょう。浦賀に行くためには、東の金沢道・浦賀道と、西の鎌倉道・浦賀道

近世の三浦半島の道



の二通りがありました。東の浦賀道は、東海道の保土ヶ谷宿で分かれて金沢（現・横浜市金沢区）を経て浦賀へと至る半島の東側を通る

道です。江戸から十七里半と距離は短いですが、金沢から浦賀への陸路は山が多く難所の連続でした。

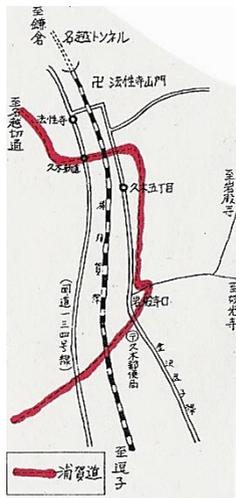
西の浦賀道は、東海道の戸塚宿で分かれて鎌倉から小坪（現・逗子市）、堀内（現・葉山町）を経て三浦半島を横断し、大津（現・横須賀市）を通過して浦賀へ通じる道です。江戸から十九里と東の浦賀道より距離は長くなっています。

『日本歴史地名体系 14 神奈川県地名』(平凡社) 巻末、「近世交通図」の一部に加筆

『浦賀道見取絵図』にはこちらの浦賀道が描か

逗子の浦賀道

浦賀道は逗子をどのように通っていたのでしょうか。『浦賀道見取絵図』によると、名越切通〜久野谷村（現在の久木）〜現在の新宿まで含む小坪村〜旧・田越橋（現・富士見橋）〜桜山村〜鏡摺〜葉山とい



多々良四郎著「三浦半島への古道をたどる」より

う道筋です。近代の開発により、当時の浦賀道はそのまま残ってはいません。現在の逗子では、おおよそ名越切通〜亀ヶ岡団地〜久木新道バス停付近〜久木郵便局付近〜新宿〜富士見橋（旧・田越橋）〜鏡摺

〜葉山という道筋になります。

浦賀道の一部である旧・田越橋は、『郷土誌さくらやま』によると、安永2年（一七七三）の『村明細帳記録』に記載があり、江戸時代の明和年間（一七六四〜七二）に初めて架けられたようです。



『田越浜図』[天保3年(1832)頃] 『相模国風土記稿』より

旧・田越橋は、何度も架け替えと破損、時には大破を繰り返しました。当時の海岸線は現在より内陸であったため、潮風をまともに受

けたことに加え、多くの人々の利用に耐えてきたことが想像できます。明治17年（一八八四）に橋が流失し、上流に現・田越橋が新設されました。明治27年（一八九四）に旧・田越橋があつた所に橋が架け直された際、「富士見橋」と名づけられて現在に至っています。

浦賀道の継立場

道が整備されると共に、継立場（つぎたてば）と助郷（すけごう）組合の制度も整えられました。継立場とは、人や荷物が速やかに通行できるように人足や馬が提供される場所、助郷とは継立場での人馬の補充を助けることです。幕府の命による公的通行への人馬の提供は、無償か安価な代償のみでし

たが、村の人々は本業の農作業などを中断して継立業務を行わなければなりませんでした。

三浦半島内のほとんどの村は、継立場村か助郷村に割り当てられました。逗子では小坪村に継立場が置かれ、久野谷、山野根、逗子、桜山、堀内、一色の六村が小坪村の助郷に指定されました。沼間村は、東の浦賀道の継立場の横須賀村の助郷村でした。鎌倉・英勝寺領の池子村と、鎌倉・光明寺領の柏原村（現在の久木の一部）は、寺領のため継立業務はありませんでした。

幕末には海防警備が強化され、

三浦半島の村人たちはますます人馬継立に追われるようになりました。小坪村は三崎道と浦賀道の岐路の手前にあるため、両方の道へ

人馬供出の負担があったことに加え、鎌倉・雪ノ下村の助郷としての役割も加わり、経済的に苦しい状況でした。人馬継立の要求増に対し、他の村々と力を合わせて最大限に抵抗しようとしたことが、いくつもの嘆願書に残されています。これらは、『逗子市史資料編』や『逗子市誌』で見ることができます。

浦賀道を通った人々



谷文晁（自画）

1763～1840
『日本名家肖像事典第1巻』より

老中・松平定信も浦賀道を通じて逗子を訪れました。定信は、絵師の谷文晁（たに・ぶんちょう）を記録係として伴い、沿岸調査のため、

寛政5年（一七九三）に相模、伊豆、三浦半島の海岸を巡見しました。

その記録が『公余探勝図（こうよたんしょうず）』です。相模、伊豆の諸所七十九景の中に、逗子の久野谷村と鐙摺浜の風景が描かれています。これらの風景画の複製は、図書館に所蔵している資料で見ることができます。

《主な参考資料》

- ・多々良四郎著「三浦半島への古道をたどる」
『かながわ風土記』204748号丸井図書出版
05.Aカ3・5
- ・『街道の日本史21』吉川弘文館 P 682カ
- ・『新横須賀市史』通史編近世横須賀市 21.Sヨ
- ・『三浦半島の古道を歩く』
— 逗子より浦賀まで — あしなみ 29.Bミ、
『逗子市史』通史編『逗子市』P 213.7、
『浦賀道見取絵図』東京美術 29.Bウ、
（『浦賀道分間延絵図』国立博物館所蔵
文化4年写の復刻）
- ・谷文晁筆『公余探勝図』名著出版 72.Aタ